様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ９ 月　 ６ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００３１０

研究課題名（和文）民間の視座を導入した中国通俗文学の「自国化」の研究―受容文化の多角的戦略―

研究課題名（英文）A Study of "Domestication" of Chinese Folk Literature by Introducing Folk Perspectives: A Multifaceted Strategy of Receptive Culture

研究代表者
勝山　稔（katsuyama, minoru）

東北大学・国際文化研究科・教授

研究者番号：８０３０２１９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、明代白話小説の自国化の事例研究として民間翻訳の分析を行った。中でも宇佐美延枝、伊藤貴麿、辛島驍、林房雄、榛原茂樹と近藤總草による翻訳の考察を実施し、先行研究の不備を補完した。
　宇佐美延枝の翻訳は初めの女性翻訳者であること、そして訓読翻訳の域を脱し口語訳へと向かう過渡期的な存在として重要であった。また近藤總草の翻訳は、白話と文言の何れの箇所においても正確な翻訳箇所が多く、民間翻訳としては高い水準にあり、「三言」所収篇の受容史の上でも、唐話学的な訓読翻訳から学術的翻訳へという流れの中にあって、その過渡期的存在としての民間翻訳の役割を明確に示した翻訳であると言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究成果の社会的意義としては、辛島驍と林房雄による白蛇伝の翻訳があげられる。辛島驍翻訳は現存最古の「白娘子」全訳の発見という意義があり、『警世通言』の発見からの受容活動の空白を埋める手がかりとなる。また戦後日本で映画化・アニメ化・演劇化と多彩な受容を見せた日本が受容した作品が明確化したという意義があり、「三言」受容史はもとより「白蛇傳」受容史についても極めて有益である。
　また辛島驍の翻訳を手掛かりに翻案が行われた林房雄の『白夫人の妖術』は、中国明代の小説が、戦後日本で読まれるために施された自国化に向けた受容活動の現れであると考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we analyzed folk translations as a case study of the domestication of Ming dynasty white tale novels. In particular, we examined translations by Usami Nobue, Ito Takamaro, Karashima Akira, Hayashi Fusao, Haibara Shigeki, and Kondo Fuso to complement the deficiencies of previous studies.
　The translations by Nobue Usami are important because she was the first female translator and because they represent a transitional period in the history of Japanese translations from the kun'yomi style to the colloquial style. In the history of the reception of the "Sangen" collection, this translation clearly demonstrates the role of the private translator as a transitional figure in the trend away from the kun'yomi translation of Tanghwa studies and toward academic translations.

研究分野：中国文学

キーワード：翻訳　白話小説　松枝茂夫　西遊記　三言　二拍

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

戦前の日本では中国通俗小説の受容に異変が起きていた。大学の研究者が翻訳をためらい、受容が停頓状態に陥ったのである。この状況下で翻訳を支えたのは民間の知識人であった。彼等は漢文訓読から抜け出せない研究者を尻目に、現代中国語の知識を貪欲に取り入れ『三国志演義』『西遊記』『水滸伝』等の翻訳を試み、現在日本でこれらの作品が親しまれているのは、彼等の尽力に他ならなかった。しかし彼等の翻訳は「アカデミズムの範疇から外れる」として斯界では無視あるいは蔑視され、我々は彼らの活動の概要さえも把握できない。そこで本研究では①これら民間翻訳に注目し、全く新しい民間の視座を導入した中国通俗文化受容史の構築とその特色の分析に取り組むとともに、さらに②日本人による二次創作を含めた中国通俗小説の「自国化」の試みまでも包括して、真の意味での文化受容の体系化を目指すこととしたい。

２．研究の目的

研究の目的は大きく４点に分かれる

（１）明代通俗小説『三言』をケース・スタディとして民間翻訳の水準を解析する

民間の視座を導入した受容史を構築するためには、まず民間翻訳が検討に足る価値があることを客観的に証明する必要がある。そのため、本研究では民間翻訳の翻訳水準について、同時期の大学の専門家による翻訳と対照分析を実施した。これについては基礎研究を実施済みであり、その成果を踏まえ、民間翻訳の中でも重要な宇佐美延枝・佐藤春夫・鈴木真海の翻訳の詳細な分析を試みたい。なお宇佐美延枝の翻訳『抱甕文庫』（1898）は、残本が国会図書館に一部存在するだけであったが、申請者は 2014 年７月に完本を発見、刊行から 116 年間「伝説の翻訳（魚返善雄）」として語られていた宇佐見延枝訳の実態に迫り、宇佐見訳の受容史上の位置づけまで明らかにする。

（２）民間翻訳の主役であった支那愛好者（支那通）の翻訳水準を公正に判断する

申請者は、民間翻訳が軽視・蔑視された原因の一つに、民間翻訳を担った人物の一部が「支那通」と呼ばれていたからではないかと考えている。支那通は、中国語を解する中国社会事情通を指し、大正～戦前の言論界で活躍した。しかし支那通は満州事変の切迫した中国情勢にもかかわらず、一向に文化趣味人の範疇から脱却できず、現在ではしばしば軽蔑の意味を込めて「支那通」が用いられる。

そのため斯界では支那通の業績に否定的で､その判断が民間翻訳の軽視･蔑視を助長している。そこで今回は、彼等の訳業について適正に翻訳水準の分析を行い、受容史の上で価値があるか否かを誰にでも納得できる客観的データを示し、その価値を実証的に解明する。

（３）アカデミズムでは決して見られなかった民間による翻案や二次的創作という多様な受容活動（自国化）の全体像を明らかにする

また翻訳された中国通俗小説は、それを資源として、様々な加工を行い日本人の人口に膾炙するにいたったという言わば二次的創作が試みられている。その担い手には原作を読解できなかった者も多く、原典から離れ、自国人による自国の言語に翻訳された作品に由来した二次的創作（翻案等）や、それに類する自国的解釈の過程、すなわち「自国化」が行われている点に申請者は注目する。

アカデミズムの世界では翻訳・解釈が本業であり原典を読めない場合、その作品を論じる資格を持たない。しかし民間では自らのアイデア・構想をもとに翻訳を自由自在に加工し、物語もさらなる娯楽化を加えるフレキシブルさを兼ね備えている。

中国文学の分野には通俗小説の先行研究が数多く存在するが、いずれも作品の読解や版本などの基礎研究にすぎない｡また近世日本における中国文学の受容研究が盛んに行われているが、「自国化」に焦点をしぼった研究は未だ見られない。そこで申請者は､「自国化」の視点という切り口を導入し中国通俗文芸の受容から多種多様な自国化という現象までを網羅した体系的研究を到達目標として取り組み、膠着化した漢文学界に一石を投じる。

（４）『西遊記』については、近現代日本における西遊記翻訳史を構築するために、ターニングポイントとなる翻訳者たちの位置と、翻訳書全体が時代と共に変化した状況を明らかにした。また近代小説については、中国文学研究会の同人の活動に注目し、白話文学をはじめ、戦時下と戦後日本における中国文学の受容を明らかにした。

３．本研究の独自性と創造性

学術的な特色と独創的な点は、①見落とされていた民間翻訳に着目すること。そして②民間特有の「自国化」現象から先行研究を再構築出来る点につきる。つまり一つの研究で二つの成果が期待され、斯界に非常に大きなインパクトを与えることができる。予想される結果と意義は以下の通りである。

①中国通俗小説の受容の全体像をトータルで把握できる

申請者によるこの研究を行うことで、明治期以後の受容実態を総体的・体系的として把握で

きる。大学研究者による翻訳活動と、民間翻訳による通俗小説の受容・自国化の動向をパラレルに取り入れることで、官民それぞれの動向を多角的に検証できる。そして、語釈・解釈の正確さに唯一無二の尺度として凝り固まっていた翻訳史に、中国通俗文化がどれだけ日本で多様化し浸透したのかを加味することで、より正確に受容実態が把握することができる。また民間翻訳者の発生には、渡航による中国体験が大きな契機となっている。その点も留意しつつ検討を重ねた。

②本邦で始めて中国由来の通俗小説の二次創作の実態把握が可能となる

従来の受容史は、いわば原典翻訳の歴史をトレースしたものであり、翻訳史と語義は一致していた。しかし本研究では原典翻訳は勿論のこと、原典に基づいた構想をもとに日本で二次創作された作品群にまで考察の射程を広げることで、中国通俗文化が如何に日本人に浸透し、日本で市民権を得ることになったのかまで精緻に分析することができる。これにより本邦で始めて中国由来の通俗小説の二次創作活動の実態把握が可能となる。

『西遊記』については、近現代日本における西遊記翻訳史を構築するために、ターニングポイントに位置する伊藤貴麿の訳業全体と、それに準じる佐藤春夫・中島孤島らの『西遊記』翻訳について検討し、西遊記翻訳史に位置づけた。

４．研究成果

本研究では、申請者が発見した民間翻訳の中でも宇佐美延枝、伊藤貴麿、辛島驍、林房雄、榛原茂樹と近藤總草による翻訳の考察を実施し、先行研究の不備を補完した。

〔宇佐美延枝の研究〕　宇佐美延枝による『抱甕文庫』は「三言」所収篇の翻訳である。宇佐美による「自序」によると、彼女は静養中に「三言」の選集『今古奇觀』全 40 篇のうち 20 篇を試訳したが、その後翻訳の存在が哲学書院主人に知られる所となった。宇佐美の翻訳は書肆の説得の末に刊行され、翻訳の続刊は 10 編まで企画されていた。『今古奇觀』の半数に及ぶ翻訳規模と、訓読翻訳が一般的であった明治 31 年の時期に、散文体の訳文を試みるなど、翻訳時期を考慮しても短篇白話小説受容史の観点からは看過できない存在と言える。ただ今回の宇佐美訳は、当時研究者の間で行われていた白話小説の訓読翻訳に関する是非についての議論にも言及されておらず、恐らくは口語訳化の議論を認識せずに翻訳した可能性が高い。

宇佐美の文体は、漢字仮名まじりによる散文体が採用されている。翻訳の姿勢については概ね原文に即して翻訳を試みており､原文に対する忠実度も 1925 年発表の鈴木真海訳とほぼ同一で、翻訳水準も低くはない。しかし白話語彙の未習熟のためか、原文をそのまま訳語としているほか、多少内容説明の必要からか、原文にない訳者独自の加筆が散見される。しかし、出版当時白話語彙に関する工具書も十分になく、且つ中国人の助力もない状況で、比較的高い水準で翻訳を刊行したこと、20 篇の翻訳を行い 10 篇の出版を企画したこと、初めの女性翻訳者であること、そして訓読翻訳の域を脱し口語訳へと向かう過渡期的な存在として､「三言」所収篇の受容史の上では画期的な存在であった。

また宇佐美延枝は『抱甕文庫　第壱篇』の刊行（1898 年 6 月）以後の続編刊行に向けて 8 篇の翻訳が完了していたが、現時点の調査では続編刊行は確認できない。恐らくは出版用に準備していた翻訳の一篇が『讀賣新聞』紙上の「花仙」連載（1898 年 7 月）となり､「女秀才」（1899 年 1 月）及び「唐伯虎」（1899 年 10 月）二篇が『文藝倶樂部』に掲載されたものと推論できた。また延枝による「唐伯虎」の翻訳分析を試みると、その中には難解な箇所、特殊な語彙に対応できていない箇所や、訳者のケアレスミスも確認されたが、概ね原文に即し忠実を旨としていた。また彼女が翻訳した篇は先行する満足な翻訳が存在しないこと、使用テキストが標点なしの影印本であったという劣悪な環境下で行われた点を考慮すれば、彼女の翻訳水準は刮目に値すると言える。また延枝の夫である金子彌平は、通辯（通訳）見習いとして渡航している点から、中国語を解していた可能性が高い。また彼による中国各地での活躍は、アジアが一丸となって欧米列強の支配に立ち向かおうというアジア主義的心性に依拠していた。彌平はアジア主義的心性を共有する中村正直と交流を有したが、中村は東京女子師範学校における宇佐美の師であり、彌平と延枝を結びつけたのは中村の可能性が高い。中国語・中国文学に対する該博な知識を有する彌平との夫婦生活は、延枝の訳業に少なからぬ影響を与えたのではないかと思料される。このような彌平の協力による延枝の翻訳というスタイルは、中国人の許問蓉氏が助力した桃義会の翻訳『鴛鴦譜』（1924）という手法と類似する。延枝個人の努力では克服出来ない語学上の壁があったに相違ない。そこで当時難解な翻訳を手掛けられたのは、語学的な知識を得ていた彌平の存在が必要不可欠であったと思われるのである。

〔伊藤貴麿の研究〕　小説家・児童文学者として著名な伊藤貴麿は､「三言」を中心とした短篇白話小説集の翻訳を試みる一方で、長篇白話小説『西遊記』の翻訳と受容も手掛けていた。伊藤訳による『支那文學大觀』所載の短篇白話小説集『今古奇觀』の伊藤による翻訳「恨は長し（王嬌鸞百年長恨）」と「李暇公（李暇公窮邸遇俠客）」について翻訳状況を原文と対照しつつ検証を試みた。その結果、伊藤訳は概ね原文に忠実であり、一部の語釈で難儀したと思われる場面が見られるが、文脈を考慮しつつ文意に齟齬のないよう配慮しながら翻訳していること

が確認出来た。一方の長篇白話小説の翻訳である伊藤訳『(新譯) 西遊記』は、それまで一般的であった『画本西遊全伝』を底本とした諸々の『西遊記』とは一線を画し、枝葉のストーリーや詳細な描写、会話などを残した方明改編『西遊記』を底本として翻訳していたことが判明した。また『西遊記』について、伊藤訳と同時期の翻訳である佐藤春夫訳と比較を行った。その結果、佐藤訳に比べて伊藤訳は原文内容の簡略化の傾向がみられた。しかし、この傾向は伊藤が翻訳の底本とした方明本に由来するものであった。また、佐藤訳で語義を誤ったと思われるいずれの箇所でも、伊藤訳では語義を正確に把握しており、佐藤訳に比べても伊藤訳の正確さは高い水準にあった。伊藤訳を検討する際には、『支那文學大觀』や『(新譯) 西遊記』が発表された時期の学術状況も考慮する必要がある。伊藤の『今古奇觀』翻訳の時点では翻訳に必要となる工具書も、学術的検討も不十分であった。『今古奇觀』の翻訳作業の時点で語釈を担当した宮原民平からの学術的支援を受けた可能性が否定できないものの、十分な工具書が準備できなかった時代的な背景も考慮すれば、伊藤の翻訳の正確さは当時に於いて高い水準にあったことは相違ないと判断した。

〔辛島驍の研究〕　また論者の近年の調査によって、辛島驍による「白娘子」の邦訳が発見された。これは現存最古の「白娘子」全訳の発見という意義があり、『警世通言』の発見からの受容活動の空白を埋める手がかりとなる。また戦後日本で映画化・アニメ化・演劇化と多彩な受容を見せた日本が受容した作品が明確化したという意義があり、「三言」受容史はもとより「白蛇傳」受容史についても極めて有益な資料となろう。翻訳者の辛島驍は滿鐵大連圖書館蔵『二刻増補警世通言』28 巻の発見と『全譯中國文學大系』で著名であるが、大日本雄弁会講談社から刊行された林房雄・八住利男著『白夫人の妖恋』に翻訳が収録されていた。書名にも奥付の著者名にも一切辛島の名前は見えない。それが斯界で看過されていた原因である。また本書には辛島自身の翻訳の経緯が説明され、林房雄からの依頼であり、林は辛島の翻訳をもとにリライトして文学作品化したことも明記されていた。小説家で文芸評論家の林房雄は、終戦直後に公職追放を受けた。彼はこの時期の前後に辛島から『今古奇觀』、「三言」等の翻訳を典拠とした小説を公刊したが、その一つが「白娘子」の翻訳をもとに翻案した「白夫人の妖術」であり、その後の映画化やアニメ化によって白蛇傳が日本の人口に膾炙することになった。辛島訳には民間翻訳と比べて①単純な誤訳が極めて少ないこと、そして②原文にない表現や補足説明的な加筆が極めて少ない点があげられる。また辛島の翻訳状況を分析すると、辛島訳による誤訳の箇所は訳者の語学的水準の問題というよりも、当時の白話語彙に関する研究水準の問題であったと判断される。「三言」の受容史の観点から辛島訳を見ると、民間翻訳から大学の研究者による翻訳へという受容交代期に位置付けられるとともに、その後の「三言」所収篇の翻訳整備に向けた過渡期的な存在であるとも思われる。

〔林房雄の研究〕　また本研究では明代短篇白話小説の翻案作品である林房雄『白夫人の妖術』による改変と創作を分析した。林房雄による『白夫人の妖術』には、原典となる「白娘子」の原文にどれほど準拠しているか、また文脈にどれほど準拠しているかの兼ね合いから三つに分類できた。①「白娘子」の原文や文脈に準拠した箇所は、『妖術』の前半に多い。また林房雄は辛島の訳文以外にも『警世通言』の原文も参照していることが確認出来る。②「白娘子」の原文に準拠せず文脈に準拠した箇所では、登場人物の動作行為に関する因果関係の明確化が行われているほか、明代の中国人読者にはリアルな描写が、現在の日本人読者にとって要不要の箇所が加除調整される傾向が確認できた。③「白娘子」の原文や文脈にも準拠しない箇所についても、一定の方向性が看取できた。その傾向は、現代の日本人がこれらを閲読した際に、内容理解が難しい点や、本来の文脈からずれた展開や、人に対する情けに反する点が翻案によって修正・改変されていた。また作品の根本をなす設定である「妖怪」に対する中国と日本の認識の違いが、白夫人というキャラクター像にも影響を与えていた。そして『警世通言』では絶対悪として雷峯塔の下で鎮圧される存在であったのに対して、『妖術』では、一人の女として一人の男を愛する気持ちは妖怪も人間も関係はないとして許仙と共に生きる結末に変えられている。

このような『白夫人の妖術』による翻案や創作は、明代と現代、そして中国と日本という相異なる読者の持つ予備知識の差異への対応であった。更に作品の結末の大幅な改変が可能となったのは、白夫人という「妖怪」から導き出される中国と日本における認識の相違に由来した結果であることが明らかになった。そしてこれら『白夫人の妖術』における一連の翻案や創作の多くは、中国明代の小説が、戦後日本で読まれるために施された自国化に向けた受容活動の現れであると考えられていた。

〔榛原茂樹の研究〕　榛原茂樹（波多野乾一）は、大正から昭和の戦前期に活躍した新聞記者であり、中国研究家である。彼は中国風俗という趣味的・文人的な偏向を示した支那通とは異なり、当時の中国共産党に関する研究が根本にあった。彼の業績には京劇や麻雀などが挙げられるが、翻訳発表当時は文学にも傾倒しており、その一環で「三言」」が翻訳されたと推測できる。

榛原の翻訳状況であるが、白話文については概ね正確な翻訳が行われているものの、文言等の書面語の理解には幾つかの翻訳不備が確認出来た。また榛原訳には、原文箇所の省略のほか

加筆が格段に多く、その理由は文脈の整合性を重視した傾向に由来するものと思われる。また一部では原文の誤訳から派生した誤解に基づく加筆も確認されるなど、原文との齟齬も見られた。

〔近藤總草の研究〕　今回の研究で発見された近藤總草は、満洲事変前の関東州や、事変後の満洲国などの旧外地にある各地の学校に赴任した教員の可能性が高く、かかる現地での物語収集作業の一環として「三言」を翻訳していた。近藤の翻訳状況は、誌面掲載の制約から訳文の中には原文の省略が見られた。その省略は特徴的で、原文の中から文脈に影響を与えない箇所や冗長と思われる表現を確認しながら削除してゆくという方式である。この場合には原文の中で文脈上の要不要を逐一判断しなければならず、作品全体を正確に理解していなければ実施できない方法を採用しており、それが彼の原文理解の正確さと翻訳水準の高さを示す証左となっている。また近藤による翻訳は、白話と文言の何れの箇所においても正確な翻訳箇所が多く、白話小説を読解する上で必要な語学的知識のほか、文言に対応するだけの訓読の知識も十全に備えている翻訳者であることが推測できる。民間翻訳としては高い水準にあり、「三言」所収篇の受容史の上でも、唐話学的な訓読翻訳から学術的翻訳へという流れの中にあって、その過渡期的存在としての民間翻訳の役割を明確に示した翻訳であると言える。

なお『西遊記』については、翻訳書を底本とするものから原本を底本にするものへのターニングポイントとなる伊藤貴麿の著作全体を調査し、翻訳についてはその訳業の概要をまとめた。その一方で、伊藤との比較対象として佐藤春夫訳『西遊記』を調査し、伊藤との比較によってそれぞれの特徴を洗い出した。また、伊藤に先駆けて原本に挑んだ訳者として、中島孤島訳『西遊記』について調査を行い、西遊記翻訳史にどのように位置づけるべきかを検討した。

また近代小説については、竹内好の『魯迅』（1944）、武田泰淳の『司馬遷』（1945）、松枝茂夫の翻訳『思痛記』（1947）をとりあげ、それぞれの歴史的文脈において詳細に再検討・分析することによって、竹内好の魯迅受容、武田泰淳の司馬遷受容、および松枝茂夫の白話文学受容について考察した。

その結果、共通的にみられるのは、異文化受容の際に見られる「異文化」に対する加工である。竹内好は戦時下において中国への無理解を指摘しながら、皮肉なことに彼自身の魯迅に投じた視線もオリエンタリズムの罠に陥った。武田泰淳もしかり。また、松枝茂夫の翻訳した『思痛記』を考察することで、戦時下の白話文学を翻訳する実像を明らかにしたと同時に、その翻訳作品の意義を検討した。翻訳は決して単なる言語を置き換える行為だけではなく、翻訳によって既存文化の非合理性を暴露することも可能であるといえる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 勝山　稔	４．巻 27
２．論文標題 近代日本に於ける『警世通言』巻28「白娘子永鎮雷峰塔」の受容について――辛島驍訳の発見を中心として	５．発行年 2021年
３．雑誌名 国際文化研究	６．最初と最後の頁 13-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 勝山　稔	４．巻 28
２．論文標題 近代日本に於ける『警世通言』巻二八「白娘子永鎮雷峰塔」の受容について――辛島驍訳本の発見と林房雄による小説化を中心として	５．発行年 2020年
３．雑誌名 国際文化研究科論集	６．最初と最後の頁 79-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 勝山稔・金子宗德	４．巻 28
２．論文標題 近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について――宇佐美延枝「唐伯虎」（1898）と金子彌平との関係を中心に	５．発行年 2020年
３．雑誌名 国際文化研究科論集	６．最初と最後の頁 61-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 勝山　稔	４．巻 27
２．論文標題 「近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について ―新たに発見された宇佐美延枝「花精」（1898）を中心として―」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 国際文化研究科論集	６．最初と最後の頁 58-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 勝山　稔	4．巻 27
2．論文標題 「近代日本に於ける中国白話小説の受容について―伊藤貴麿の翻訳・受容活動を中心として―」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 国際文化研究科論集	6．最初と最後の頁 41-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 朱　琳	4．巻 136
2．論文標題 「戦後日本の近代思想における司馬遷と魯迅の様相―武田泰淳と竹内好の視点を中心に―」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『比較文化研究』	6．最初と最後の頁 pp.105-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 井上　浩一	4．巻 26
2．論文標題 「伊藤貴麿の「中国もの」児童向け読み物とその題材－附　伊藤貴麿著作目録」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『中国児童文学』	6．最初と最後の頁 pp.60-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 勝山稔	4．巻 26
2．論文標題 井上紅梅による『今古奇観』の翻訳について――『日刊支那事情』紙上における連載を中心として――	5．発行年 2018年
3．雑誌名 国際文化研究科論集	6．最初と最後の頁 120-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 勝山稔	4．巻 26
2．論文標題 近代日本に於ける中国白話小説『三言』所収篇の受容について――宇佐美延枝『李謫仙・蘇小妹（抱甕文庫第壹編）』を中心として――	5．発行年 2018年
3．雑誌名 国際文化研究科論集	6．最初と最後の頁 101-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 勝山 稔
2．発表標題 近代日本に於ける中国白話小説「三言」所収篇の受容について――宇佐美延枝「唐伯虎」（1898）と金子彌平との関係を中心に
3．学会等名 海域交流と中国文化研究会
4．発表年 2020年

1．発表者名 勝山 稔
2．発表標題 近代日本に於ける『警世通言』巻二八「白娘子永鎮雷峰塔」の受容について――辛島驍訳本の発見と林房雄による小説化を中心として
3．学会等名 海域交流と中国文化研究会
4．発表年 2020年

1．発表者名 勝山 稔
2．発表標題 近代日本に於ける『警世通言』巻28「白娘子永鎮雷峰塔」の受容について――辛島驍訳の発見を中心として
3．学会等名 海域交流と中国文化研究会
4．発表年 2021年

１．発表者名 勝山稔
２．発表標題 近年発見された宇佐美延枝関係翻訳（「花精」）（不幸の幸）について」
３．学会等名 海域交流と中国文化研究会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	井上　浩一 (Inoue Kouichi) (40587169)	東北大学・高度教養教育・学生支援機構・非常勤講師 (11301)	
研究分担者	朱　琳 (Zhu Lin) (50815925)	仙台高等専門学校・総合工学科・助教 (51303)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関